

読書感想文部門

■総評

今年は、原稿用紙五枚を生かして、書かれていた作品が少なかったように思われます。低学年は少なくとも三〜四枚、高学年はしつかり五枚、書いてほしいものです。

本を選ぶところから、読書感想文は始まっています。本の内容をていねいに読み取ったうえで、自分の感想をまとめ、のびのびと表現した作品を期待します。

書いていてすてきです。

「糸でいきる虫たち」をよんで

大阪教育大学教育学部附属天王寺小学校

一年 駿田 尚志

文部大臣奨励賞

本やさんでひょうしを見て、アレ

ッと思ったんです。ふつうのバッタのなかまは、糸を出さないと生きていたのに、バッタのおをした虫が、糸をせっちゃんぐざいにして、葉をつ



ないでいるしやしがあつたからです。ほんとにかわったかお。よんでみると、コロギスという虫だとわかりました。コオロギだったらよく知っているけれど、コロギスなんてきいたことがありませんでした。てきからみをまもるために、テントのようなすにみをかくしているのですね。夜にはこうもりがくるけれど、だいじょうぶなのだろうか。

アオバセセリのような虫もおもしろいすにすんでいます。葉ですをつくることは、コロギスとおなじですが、そのすにたくさんの小さなまどまでつ

糸のことでは、ぼくは、ようちえんでうれしい思い出があります。夏みかんの木の下におちていたギアゲハのさなぎを、えん長先生がもってこられました。そのままほっておくとかしたとき、はねをかわかせなくてとべなくなるからです。さなぎの下はボンドでくっつけて、上は糸のようにまるめたセロハンテープで、木にとめてあげました。さなぎは、ピクッピクッと、ときどきうごいていました。できるだけしぜんなかたちでとめてあげただけれど、人間がやったのだから、ぼくたちは、ちゃんとうかするかどうか心配していました。ある日、ぜんぜんうごかないので、先生のへやへ行つて、

「アゲハチョウどうしたん。」

ときいたら、

「きのうの夜、うかして虫かごの中をとんでいて、かわいそうだから、まどからとばしてあげたよ。」と、えん長先生がおしえてくださいました。ぼくは、とてもうれしくて、みんなに大きなこえでこのことをいいました。チョウたちにとって、糸は、ものすごくだいじなものなのです。

ほかにも、今まで知らなかったつかいかたをす

る虫が、のっていました。ミヤマシロチョウのよう虫が、糸ですを作るだけではなくて、糸でみちを作るのにはびっくりしました。だって、今まで知っていたチョウのよう虫は、そんなことはしません。でも、糸があれば、えさをたべにいつて、かえってくるのにまよわないでいいなと思います。入学してすぐのころ、ぼくは、学校からかえるとき、ち下てつのできをのりこしてしまいました。学校のつう学ろに糸があつたらしいのにな。

この本をよんで、ぼくは、わかったことがいっぱいありました。また、ふしぎに思うこともふえました。今までは、イラガのはでな毛虫を見ても、いたいぞ、こわいぞ、ぐらいいしか思っていました。でしたが、あのまゆは、ほんとうにふしぎです。

まゆのようは、どうやって作るのかな。ペンキをぬるわけじゃないし。自ぜんしはくぶつかんへでんわをしてきいてみたら、けんきゅうをしている人はいるけれど、まだはつきりしたことがわかっていないそうです。イラガのように、いえのにもいる虫のことでも、わかっていないことがあるのです。こんどイラガのよう虫を見つけたら、かつてまゆを作るところを見たいと思います。

■選評

「糸でいきる虫たち」の内容をていねいに読み取ったうえで、作品と自分とのかかわりが、しっかり書かれています。思ったこと、不思議に感じたこと、わかったことなどが、素直に表現されているので、感動が伝わってきます。